

國學院大學學術情報リポジトリ

〔談話室〕 渋谷で中国古典を読む

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川合, 康三, Kawai, Kozo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000410

渋谷で中国古典を読む

川合康三

三年前の秋、初めて渋谷駅に降り立った時は、度肝を抜かれた。駅を取り囲むように周りに天を突くビルがいくつもそびえ、かつまた現に次々と建てられつつある。工事の進捗はとも速くて、そのために通路がしょっちゅう替わる。前に通った道がもう無くなっていて、掲示を見ながら新しい道を進むほかない。

建築物だけではない。渋谷名物のスクランブル交差点では、信号が変わったとたん、おびたらしい人の群れがまるで一つの生き物のように一斉に動き出す。通りを埋め尽くすなかには異国の人も混じる。一番を覆う絶え間ない狂騒とさまざまなエネルギー——渋谷駅周辺は現代日本の、さらには現代世界の、最先端の姿を見せている。ここに蝟集する若い人たちは、わたしなどが知るすべもない文化を享受しているのだろう。ファッション、音楽、演劇、アニメ……

緩やかな坂道をのぼった丘の上に立つ大学では、中国古典の様々なジャンルの授業が繰り広げられている。時代の最も新しい流行の渦中をくぐり抜けてきた学生は、いきなり数百年から二千数百年前の言葉に顔をつきあわせることになる。おまけに漢字だらけのテキスト。彼らの戸惑いは察するに余りある。ことに一年生のクラスでは、なじみづらさがかちらにも伝わってくる。

しかし三年生になると様子はずいぶん異なる。もはや違和感を覚えることなく、国も異なり時代も違うもう一つの文化をごく自然に受け止めているかのようだ。教授陣の熱意こもった教育なくしては、この「変身」は考えられない。彼らが身につけた学習態度は、大学を離れても大切なものだ。学業に限らず、いま自分が集中すべき対象に向かって自分を集中させる能力、それを獲得して毎年数十人の学生が中国文学科の業を終えて、再び現代の社会に出て行く。

洪谷の四年間を通して身につけるのは、意志的な集中力だけではない。中国の詩文を読む学力。これは専門家としてのスキルである。重要な作品を必修科目としてそろえたカリキュラムは実にうまく考えられていると思う。もつとも、わずか四年で完全を期すのがむずかしいことは、その十倍以上も勉強してきた自分の現状を顧みればすぐわかる。そうではあるけれども、せめて中国文学科に学んだ以上、ほかの人とは明らかに差異がわかるほどの力は習得したい。

洪谷の町は新しさそのもの、大学で学ぶ古典は時代遅れで古くさいもの——入学したばかりの学生を戸惑わせるのは、古と新のそんな相克であろうが、果たして本当に古典は古いものなのだろうか。今にのこされている古典は、確かにずっとずっと昔に書かれた言葉であるけれども、実はそれは固定したまま凍結されてきたものではない。近年盛んに発掘される出土文物や百年ほど前に敦煌で発見された文書を除けば、古典は常にそれぞれの時代を反映して書き直されてきたものであり、時代ごとの解釈によつて新たに捉え直されたものなのだ。言ってみれば、各時代の「新」の集積が古典なのだ。それゆえにわたしたちも今という時代のなかで、今という時代を反映しながら古典を読むしかないし、それではないのだと思う。材料は古いものであつても、その扱い方は新しいのが当然であり、そうして次の時代に受け渡していくことになる。

古典はこのように長い歴史の過程で蓄積されてきた知的営為の結実といふことができる。それを通して人々が積み重ねてきた文化の厚みに身をもつて触れ、そこに畏敬の念をいだくこと、これは意志による集中力の操作とか、専門分野における学力とかよりさらに大きな意義を有するのではないだろうか。それこそが文学部の教育を通して得るべきものだと思う。人間を長い時間のスパンで捉えようと、わたしたち自身も歴史の一点に過ぎないことを知る。文化に対する畏敬の念は、自分の卑小さを知ることでもある。こうした古典の世界に知的興味を駆り立てる教育ができるかいなか、そこに教師の力量が問われることになる。

(中国古典文学)